

2019 年度 第8回観察会 記録

日 時	2020 年 1 月 8 日 (水)～16 日 (木)	
観察地	フィリピン共和国 : ネグロス島、ルソン島 イフガオ	
講 師	コーディネーター : 田中 克先生、ネグロス島 倉田 麻里先生、イフガオ 中村 浩二先生	
テーマ	フィリピン 2 島で森里海連環を体感する。	
備 考	参加者 18 名 (田中先生、スタッフ 2 名含む)	記録: 坪井都子

《はじめに》

フィリピン・ネグロス島で国際環境 NGO「イカオ・アコ」(注で、フィリピン版「森は海の恋人」活動)に取り組む倉田麻里先生と、ルソン島北部のイフガオ州で 1 千年の歴史のある世界遺産「イフガオ棚田」の再生に取り組む石川県立自然資料館館長・中村浩二先生にご案内いただき、フィリピン 2 島で自然観察会を行ないました。倉田先生には 2018 年 1 月に、中村先生には 2019 年 5 月に講演していただいたご縁によるものです。

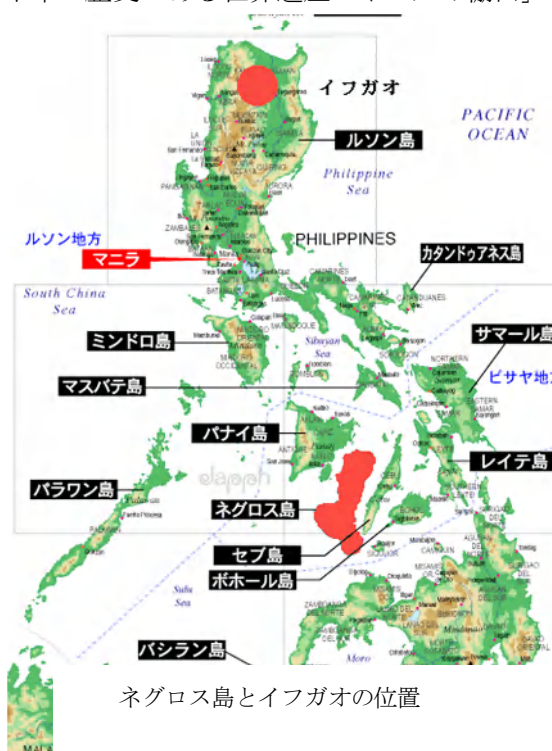
(注)「イカオ・アコ」とはフィリピンの言葉で“あなたと私”を意味し、フィリピン人と日本人が共に協力して環境活動を進めていこうというメッセージが込められています。



倉田麻里先生



中村浩二先生



ネグロス島とイフガオの位置

1. ネグロス島にて

1 日目 (1 月 8 日) 晴れ

関西空港からマニラ空港経由でネグロス島のバコロド空港まで 7 時間 50 分かけ到着。バン 2 台に乗り込み車窓から点在する島々、青い空、美しいうろこ雲、絵葉書のような夕焼けを背景にココナツヤシ並木……と、南国情緒満点の景観を楽しみながら、ホテルに向かう。

2 日目 (1 月 9 日) 薄曇り

マングローブ林は、海岸沿いの村々を高波や強風から守ってくれるとても大切なものである。ところが 1960 年代以降、各地で養殖池の建設や工業用地の確保、炭の生産などのため、大規模な伐採が行われた。河川上流部の森林も海外企業により大規模に伐採された。1870 年代には島の 80% を占めていた森林面積が 1992 年にはわずか 4% になってしまったという。

倉田先生は京都大学で学んだ森里海連環学をフィリピンで実践すべく、JICA の支援で活動する国際 NGO「イカオ・アコ」のプロジェクト・マネージャーとして 2008 年からフィリピン版「森は海の恋人」活動を始めた。マングローブ林の再生に留まらず、元は森であった上流地域への植林を現地の人々や日本からのボランティア、スタディ・ツアー参加者たちと共に行ってきた。まさにフィリピン版「森は海の恋人」活動である。

(1) カカオの植林

倉田先生の夫君の出身地バタッグ村は標高 700m、乾期と雨期のある亜熱帯高地林で、ここにカカオを植林し、換金植物としている。私たちも苗を 1 人 10 本植林した。でこぼこの斜面地に農場や村人の手ほどきを受けながら植え付けた。数年後、10m 近くのカカオの大樹に育つことを願いながら。



(2) 日本神社

「日本神社」(右写真)に案内された。第二次世界大戦で、当時アメリカ統治下であったフィリピンは、1941 年日本に侵攻され約 4 年間占領された。シライ市にはネグロス島で最後まで日本兵がいたが、通信部隊の小隊長を務めていた故・土居氏は、上官から教会爆破に渡された爆弾を海に捨てるなど、現地の人に思いやりのある行動をしたことで地元民に愛されていた。土居氏は戦後現地に残留した日系二世支援のために何度もネグロスに足を運んだ。現在のイカオ・アコ代表と出会い、「地元の人のためになる活動はないか」と協議した結果、始めたのが現在のマングローブ植林とのこと。

カカオの木

カカオの苗の植林体験風景



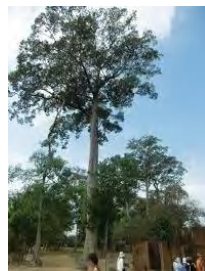
日本神社は土居さんが、仲間と現地で亡くなった日本人慰霊のために建てた。戦時中の日本とフィリピンは敵国同士の関係にあったにも関わらず、土居さんは地元の人々から慕われ、現在も地元民の参拝が続いているとのこと。フィリピンの人々の人情に私たちと同じものを感じた。

(3) 植物観察

自生のコーヒーの木にたわわについた可愛い赤い実、ラワン、巨大なヘゴ、フィリピンアカシア、白くて大きな実のマラン、ゆうに高さ 10m を超えるココナツヤシの木、フィリピンの固有種バレットツリー、悠々と草を食べる水牛の親子等を見ることができ、豊かな自然とその力強さに圧倒される思いであった。



コーヒーの実



ラワン



ヘゴ



フィリピンアカシア



マラン (果実)



樹高 10m 余のココナツの木



水牛の親子 (家畜)

(4) 栽培実験農場の見学

新しい有機農業への積極的な取り組み事例として、栽培実験農場を見学した。温室ではブロッコリー、キャベツ、ロマネスコ、ハヤトウリ等の種苗作りと区分けした畑での栽培実験の様子を見学した。



実検農場



バダグ村での手作り昼食

3日目（1月10日） 晴

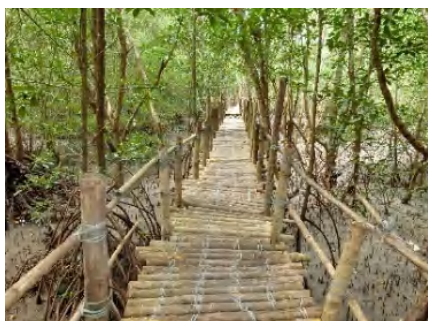
（1） マングローブ植林

前日の高地の下流の汽水域で、ハマザクロ（マングローブの一種）の苗の植林をする。犬の先導まで受けて植林場所へ約1kmほど歩く。途中すべて竹製の橋を渡る。ハマザクロの花が咲いていて、その可愛さにしばし見とれながら、やがて到着した。

植林場所には、既に地元の方々が準備万端で待ってくれていた。干潟に入るが、足がぬかるみにはまり、抜けない！手を引っ張ってもらい、何とか抜け出し、1人20本の苗を植えた。

これが育つと汽水域の生態系がよくなり、貝類・甲殻類・魚類が集まり、漁業の盛り上がりにつながる。できれば3～5年後、私たちの植えた苗の成長した姿を見に行きたいと思う。

地元の方が、珍しいオッパンという腕足類で三味線貝の仲間やマングローブ・クラブという収穫した蟹も見せてくださった。



竹の橋



ハマザクロの花



マングローブの幼木



ハマザクロ植林中。足が抜けない！



成長したマングローブ



オッパン

(2) 有機農園の見学

有機農業推進目的で設けた農業訓練研修所の農園を訪問した。

農園主のロドリゴ氏によると、かつてフィリピンの農業はサトウキビ作りが主であった。これからの国民の食生活と経済的な面から、2003 年の農地改革で手に入れた 2 ha の内、1.5 ha を有機農法で野菜を生産することにしたとのこと。2012 年の台風で大被害にあったが、再建ファンドに申し込んで立て直しを図った。2014 年には堆肥作りの農業トレーニングを受け、翌年には沖縄で新しい知識や技術を学び、今では国内外から多くの見学者や研修生を受け入れるようになったとのこと。四角豆など野菜だけでなく、ジャックフルーツ等の果物も栽培し、ほとんどをこの地域で販売しているとのことであった。

フィリピンの農業はスペイン植民地時代のプランテーション農業に基づく地主と小作人の関係が現在も続いており、全国に数十人の地主が国土の半分以上の土地を所有、政府は農地改革に挑戦するが思うようには結果が出ていないようである。しかし、小規模であってもロドリゴさんのように、自分の意志で農園経営ができる時代になり、少し希望が見えてきた思いがした。

農園内には、ホロホロチョウや子連れヤギ、子連れ犬等の動物も自由に伸び伸びと歩き回っていた。



サトウキビの発芽



ロドリゴさんお薦めの四角豆



30 cmはあるジャックフルーツ

(3) 製糖工場の見学

サトウキビの収穫は年 1 回、1 ha のサトウキビ畑で 4～6 トンの砂糖が生産できるという。製糖工場「ハワイアン・フィリピンカンパニー」を見学した。巨大な工場で、入口までサトウキビを満載した大型トラックが延々と連なり入場を待っていた。

製糖工程見学コースで砂糖のできるまでを見学した。

- ・ 運び込まれたサトウキビを粉碎するゾーン (右写真)
- ・ 絞った糖分を掻き混ぜて煮詰めるゾーンは摂氏 37 度の部屋、
- ・ 摂氏 135 度まで煮詰めたものを机状の棚に流し込んで混ぜて、茶褐色のモルドバド糖の出来上がり。
- ・ 作りたての砂糖を試食した。自然な優しい甘さで、とても美味しかった。
- ・ 生のサトウキビをしがむ皆なの顔が幼顔に見えた。 (右写真)



バコロド最後の日の夕食懇親会で「イコア・アコ」から素敵な記念の修了証を頂いた。(上写真)

2. ルソン島にて

4日目(1月11日) 曇り

マニラ市内見学

ネグロス島バコロドから首都マニラへ。正式な首都名は「メトロマニラ(マニラ首都圏)」といい、通常「マニラ」といえばメトロ・マニラを指し、17の行政地域(市や町)の集合体を意味する。

(1) リサール公園

スペインからの独立の旗手ホセ・リサールを記念した公園。58haの面積をもつアジア最大の都市公園の1つで、観光客や市民の憩いの場である。

(右写真はリサール公園内のリサール・モニュメント)



(2) サンチャゴ要塞

この要塞はパシッグ川の河口にあり、16世紀スペイン占領前のマニラ最後の首長の要塞の上に建てられ、戦略上最も重要な施設であったという。第2次世界大戦では、日本軍が占領時に、多くのフィリピン人が命を失った所で、彼らは地下牢に閉じ込められ満潮時に水死させられたという。日本人の一人として申し訳なく、胸が痛い思いであった。合掌・・・。

フィリピンの独立運動に取り組み、国民的英雄とされるホセ・リサール(1861-1896)の処刑地跡もあった。

(3) サン・アウガスチン教会

1599～1606年に建てられ、世界遺産に登録されたフィリピン石造建築の中でも最も古い教会の1つ。教会内はバロック風のインテリアで、イタリア人アーティストによる壁画や祭壇を見ることができる。教会正面右のサン・アウガスチン博物館には、宗教画や礼服や礼拝に使う品々が展示されていた。

(4) カーサ・マニラ博物館

かつてのスペイン統治時代の特権階級の暮らしぶりを窺い知ることができる。寝室やリビングルーム、ダイニングルームにアンティークの調度品や家具が展示されていた。



サンチャゴ要塞



サン・アウガスチン教会の中



カーサ・マニラ博物館

5日目(1月12日) 曇りのち晴れ

早朝ホテルを出発。7:30 マニラ発→8:45 イフガオ州カワヤン空港に到着、目的地キアンガンに向かう。14:00 ごろゲストハウス「I burao I burao」に到着した。この宿舎は医師ロベルト氏(通称; トト氏、写真右)経営で少し高台にあり、一部屋ごとコンセプトが異なりわくわく感が満たされる。トト氏は温厚でとても素敵な方だった。荷物を片付け、キアンガンの街の見学に向かった。



(1) イフガオ博物館

戦争追悼廟敷地内に、イフガオ博物館があり、イフガオに住む先住民の生活道具や装飾品などを展示しており、イフガオの歴史や民俗資料を詳しく見ることができた。昔は農業と狩猟で生活し、1950年頃に使っていた木製の農具が多く展示されていた。米造りは一期作で1月に田植え、6～7月に収穫する。伝統の草木染の織物や生活用具も展示されていた。

(2) 平和博物館

第二次大戦中のキアンガンでの出来事に関する資料や写真が展示がされている。戦時中の日米の戦闘の写真、降伏文書の写し、新聞記事、キアンガン出身の退役軍人の写真などが展示されている。

キアンガンは第 2 次世界大戦で第 14 方面軍司令官であった山下奉文陸軍大將が投降した町で、1945 年 9 月 2 日、ここで終戦の調印をした。イフガオ州は 9 月 2 日は“Victory Day”で休日となり、州都のラガウェからキアンガンに向かう道沿いに、フィリピン、アメリカ、そして日本の国旗が飾られ、キアンガン町内ではパレードが行われるという。イフガオの小さな田舎町に、第二次大戦の記憶を失わないための博物館の存在も含め、フィリピンの人々の平和への思いを重く感じたことであった。



イフガオ博物館



イフガオ博物館の展示から



平和博物館

*12 日 14:25 マニラ近郊のタール火山が爆発し、マニラ空港は閉鎖された。私たちはこのことを翌日 13 日の朝食時に知った。

6 日目 (1 月 13 日) 曇り

(1) 世界農業遺産のイフガオ棚田へ。

バナウエイのビューポイントへの往路、曲がりくねった細い自動車道のぎりぎりの断崖に張り付くように家や店が立ち並んでいた。頂上近くにはイフガオの伝統的な高床式の家屋があり、その四方の壁面に水牛等の頭蓋骨がある、魔除けとのこと。人間の頭蓋骨まで飾られ（日本兵のものだとか）真偽はどうであれ、遺骨まで戦利品となる戦争の残虐さを目の前で実感した。バナウエイの棚田は今、田植え中で水が張られ、階段状の棚が幾重にも重なり大変美しかった。



水を入れた棚田



イフガオ棚田



(2) Gohan 棚田トレッキング

観光用に整備されてはいるが、狭く急な坂道が続く棚田をトレッキングした。耕作されなくなって草木で覆われ、石垣が崩れた棚田や、田の半分以上が雑草（上写真；棚田トレッキング中）で覆われ、田植えの季節にもかかわらず水が張られていない田んぼも多く見た。



左の一部分田植えているが全体では・・・



稲の苗床

(3) タムアン村

希望者でガイドのホセンの住む「タムアン村」を訪れた。
ホセさんの親戚宅で 73 年前に亡くなった先祖の遺骨を見せてくれると言う。この村では人が亡くなると一旦埋葬し、3 年後に掘り出して洗い遺骨にして 2 回目の葬儀を行う習慣がある。この遺骨は家の中で家族と共に過ごし、守り神であるとのこと。

村では小さな子ども達が笑顔で私たちを迎えてくれ、
ニワトリやアヒル等も家の回りを自由に歩き回っていた。
苗床や水取り入れ口も見せてもらった。石を張り出しただけの石段が残されており、棚田の労働の厳しさを想像できた。

(右写真)



(4) イフガオ棚田について、中村先生からレクチャー

夕食後、中村先生が「イフガオ棚田」の世界遺産認定の経緯等について説明された。

- ・ 1995 年：イフガオ棚田が「ユネスコ世界文化遺産」に認定された。
- ・ 2001 年：農業後継者不足と無計画な観光開発により
「ユネスコ世界危機遺産」になる。
- ・ 2005 年：「世界農業遺産」に認定される。
- ・ 2012 年：保全に向けた画期的な取り組みが評価され
「世界危機遺産」が解除された。

現在、町の再生プロジェクトとして「イフガオ棚田」の後継者育成や再生に取り組んでいる。具体的には
○釘を使わないイフガオ伝統家屋を、観光用に移設し活用する。
○伝統品種からハイブリッドへの品種改良等 とのことであった。



かつてのこのような光景を取り戻したい

＊ 帰国便に確実に間に合うために、明日 14 日午後以降の予定の変更

14 日；14:00～16:00 イフガオ大学で「合同セミナー」。15 日マニラへの航空機の出発の保証がないので
終了後すぐ、イフガオ大学の用意して下さった車でマニラへ向かう。

15 日；朝 2 時頃ホテルに到着して休息。

予定どおり飛行機が運行されれば、14:25 発の飛行機に搭乗。

7日目（1月14日） 曇り**（1）イフガオの街を散策**市場見学と公園散策

火曜日ごとに開かれる市場を見学した。生きたままのアヒルやニワトリを食用として売っていた。持ち帰り、家で捌き料理して食べるという。自分の手で殺すことには抵抗感があるが、ここではそれが生活なのだ。野菜、果物、飲み物、服、サンダル、靴……。生活に必要なものを何でも売っている。公園には、伝統的なねずみ返しのついた高床式家屋が移築展示されていた。



市場風景



伝統的な高床式家屋

コーヒー焙煎工場の見学

フィリピンのコーヒーをお土産にと思っている参加者は多く、コーヒー焙煎工場を見学した。コーヒーを購入でき、買えた方はとても嬉しそうだった。



コーヒー焙煎工場



工場敷地内のコーヒーの実

（2）イフガオ州立大学との合同セミナー（14:00～16:00）

イフガオ州立大学はフィリピン政府所有の大学で、元々は1920年にアメリカの教育者によって「ナヨン集落農場学校」として設立された。

今年は創立百周年にあたり、この「合同セミナー」は記念行事の1番目に行われた。

- ① 笑顔の素敵なリナ副学長が歓迎の挨拶。
- ② 中村先生が訪問の趣旨説明とフェーズ3（注）への課題等を紹介。
- ③ スタッフ岩佐が「シニア自然大学校」と「地球環境自然学講座」の概要を紹介。
- ④ 田中克先生が『森里海のつながり・いのちの循環』を講演。

【講演要旨】

- ・日本は国土の66%が森林の森の国である。「森は海の恋人」運動は世界が注目する持続可能社会の理念であり、実践運動である。
- ・「森里海連環学」とは、森から海までの多様な自然的・社会的つながりを解きほぐす新たな統合学問である。（例；白神山地のブナ林が日本海のヒラメの稚魚を育む。）

- ・椎葉村の焼き畑による伝統農業を継承する活動のこと。
 - ・有明海を再生する活動とそれを阻む大きな壁のこと。 等々
- 森里海理論に基づく実践と今回のフィリピン自然観察会の内容もまとめて、“続く世代の幸せを第一に”をすべての価値判断基準にしていきたい。(右写真・田中先生)



○ 意見交換、質疑応答、感想 等々

イフガオ側から植樹祭への質問があり、自然学側からはフィリピンの自然の豊かさや人々の明るさ、戦争を乗り越えての優しさ、海に囲まれた国でのプラスチック汚染防止への提案等々、多岐にわたり意見や感想が出された。

時間の関係でマイスター養成の若者からの発言が聞けなかったのが、とても残念だった。

(記録者注) 【参考】フェーズ3に至るまでの経過

- ① 2006年：金沢大学による里山里海活動（教育・研究・人材養成）の中に「能登半島里山里海自然学校」ができる。
- ② 2007年：「能登里山マイスター養成プログラム」ができる。183名が修了し、マイスター認定を受ける。その成果は石川県内の自治体だけでなく、全国、国際プラットフォームに波及効果を及ぼす。
- ③ 2013年：能登の経験をイフガオへ「移植」することを提案。

フェーズ1（2014年2月～2017年2月）

世界農業遺産「イフガオの棚田」の持続的発展のための人材養成プログラムの支援事業

フェーズ2（2016年6月～2020年5月）

世界農業遺産「イフガオの棚田」と「能登の里山里海」の持続的発展のための地域連携構築事業を開始した。

- ④ イフガオ大学に「イフガオ里山養成プログラム」の事務局ができ、中村先生は月1回イフガオでレクチャーと実習を行い、毎年約20名が1週間イフガオから能登へ研修に来るとのこと。



イフガオ大学創立百年記念誌をいただく。



合同セミナー風景

16:30「合同セミナー」終了後、大学が用意されたバン2台で、マニラに向かった。

8日目（1月15日） 曇り

キアンガンからマニラまで10時間の長旅だったが、午前3時、緊急予約のマニラのホテルに到着し、休養を取った。その後、予定の飛行機便に乗るべく予約の空港へのバスを待っていると、14:25 関西空港行きの便が明日03:30に遅延との知らせが入り、ホテル延泊の手続きを取る。夕食はホテル近くのイタリアピザの店で最後のディナーとなる。ここまで怪我も、大きく体調を崩した人もなく、皆すごく元気である。明日の航空機が飛ぶことのみを祈った。

9 日目 (1 月 16 日)

04:15 (日本時刻 03:15) フィリピン航空 PR5408 便は、無事飛び立った。

08:45、関西空港に到着。自然学のスタッフが出迎えてくれた。

その顔を見てやっと日本に帰れたことを実感でき、とても嬉しかった。

《おわりに》

倉田麻里先生、中村浩二先生のお二人の講座がきっかけで「森は海の恋人」の海外版として「フィリピンの 2 島で森里海の連環を体感する」をテーマに実現した観察会でした。現地に行くまでのフィリピンへの私の思いは、日本の敗戦地・貧富の差と治安の悪さ等、マイナスのイメージが主でしたが、今回の観察会で、美しく豊かな自然とフィリピンの方々の底抜けの明るさと逞しい生活力に触れて、すっかり認識を改めました。

ネグロス島の亜熱帯高山地帯では、地元農場と村人が一体になってカカオ等収益の上がる作物の栽培に取り組み、また伝統的なサトウキビ栽培だけに頼らず、農場では有機農業の推進をはかり野菜・果物にも視野を広げ、安全で経済的にも有利な有機農法と共に新しい農業技術を導入するなど、国内外から注目されるほどの力をつけてきていました。フィリピンの方々の向上心と努力に、心から敬意を払います。

高山地帯の下流では、沿岸の汽水域に育つマングローブ林の再生に大きな努力が払われていること。また高山地帯の植林をすすめ、山の民と海に民が協働して森里海をつなぐ活動が活発に行われていることを実際に見聞きし、倉田先生のご努力と大きな成果に大変感銘を受けました。

ルソン島イフガオの棚田も能登の棚田も「世界農業遺産」。二つの棚田が抱えている課題は共通でした。

- ・機械を使わず、人力に頼らざるをえない棚田農業は、若者が引き継ぎたがらない。→
- ・耕作者が高齢化し、休耕田が増える。→
- ・棚田に草木が茂り、棚田が崩れていく。

イフガオ棚田はユネスコ世界遺産に指定されながら管理が悪く、一時「世界危機遺産」になったことがあります。イフガオ大学での「合同セミナー」で、棚田の後継者の課題や伝統を守る取り組みの課題が浮き彫りにされました。その中で中村先生たちのご尽力により日本とフィリピンが国際的に協力して「里山マイスター養成講座」が着実に実践されており、今回の「合同セミナー」も大変意義深い取り組みだと思えました。

田中先生は「ネグロス島での倉田先生たちによる森里海連環の実践的な取り組みは今後、未来型の農林漁業のモデルとして研究面からも掘り下げられることを願っています」また「イフガオ棚田を保全し未来世代につないでいく上で、今は好機であるとともに同時に危機でもあることを感じました」とおっしゃっていますが、私もこの観察会を通し、憚りながら同感という言葉そのものです。

1 月 12 日にマニラ南方 60 km の**タール火山が爆発**。噴煙のため航空機が飛行を停止し、一時帰路の予定が立たなくなりました。その中、現地の事情に詳しい倉田先生・中村先生が種々の手配の先導をして下さいました。また空路の確保が未確定な中、イフガオ大学に大学のバスを提供していただき、陸路を 10 時間かけてマニラに移動でき、そのお陰で約 13 時間の遅れで、全員無事に帰国することができました。倉田先生・中村先生とイフガオ大学の方々には紙面を借り、心からお礼申し上げます。

今回の「フィリピン自然観察会」を終え、私はフィリピンの方たちの自然と生活に対する逞しい向上心、そして何よりも辛い戦争を乗り越えての人としての大らかさ、人としての優しさに大きな感銘を受けました。本当に素晴らしい自然観察会でした。心からお礼と感謝を申し上げます。



バダック村でカカオ植林後に



イフガオ大学での「合同セミナー」終了後に